

# アートプロジェクト

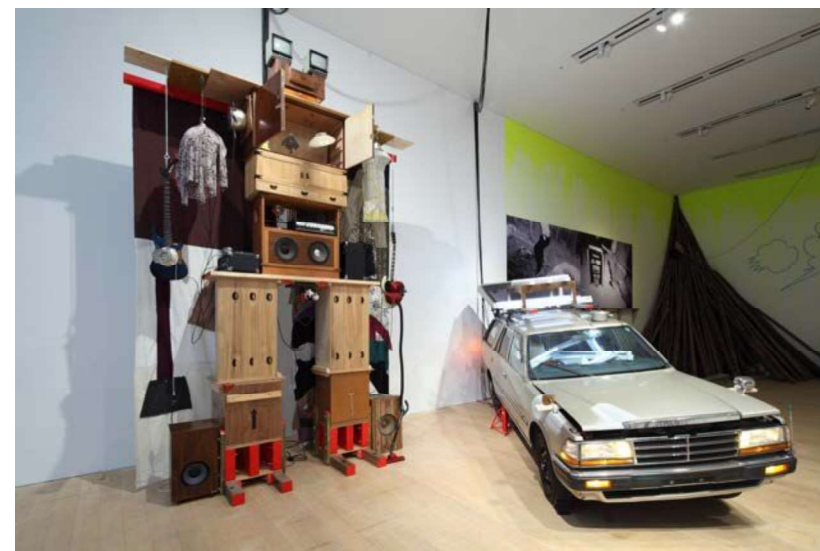
## House of Homy and Tansu Robo

今回この芸術祭に参加するにあたり、県庁所在地である千葉市の基盤が20世紀前半「軍都千葉」と呼ばれた大規模な軍備にあったという歴史を知る事になった。軍都として近代の幕が開き20世紀後半に完成した豊かな都市文化の千葉市において「2025年の国際展」という流れの上に大量生産された工業製品を組み合わせ、アナログのインダストリアルなビートを鳴らすサウンド・スカルプチュア《タンスロボ》や、日本の近代をテーマにした映像作品等を設置。プロジェクト展開予定地の特徴である、和風の引き戸が入り口の鉄骨とモルタルの建造物（工業製品）と共に風化／廃墟化（自然）しているという環境で、20世紀の痛みと享楽が、戦争と平和が、つながる過去と現在が、多面的に立ち上がる豊かな構造を作ることができるのではないか、という希望を感じた。

展示プランとして検討している内容は、まず上階部分に《リファーマービッシュド・タンスロボ》。少し上半身を起こして、壁に寄りかかるような立体的になるだろう。現実的にはドローイングより人体のフォルムから離れてリファーマービッシュドと言いつつ、人体から抽象形態に向かい壊れているような形態になるであろう。

下の階には、《Homy and the Rotators》と新作映像作品。この2つと上階のタンスロボの、映像と音声、モーター機器の動きと音で作品の時間軸を構成するプラン。「Refurbish（再生）」に限定することなく、20世紀後半からのリアリティを基盤に、共通点と相違点をテーマに新たな形の《Tansu Robo》が展開される。

市民参加のかたち：材料提供・展示鑑賞



宇治野宗輝《THE BALLAD OF EXTENDED BACKYARD》2010年

日産セドリックバン、木製家具、家電機器、ミクスト・メディア

サイズ可変 作家蔵

展示風景：「六本木クロッシング2010展：芸術は可能か？」森美術館（東京）、2010年

撮影：木奥恵三 画像提供：森美術館

### 宇治野 宗輝

1964年、東京都生まれ。東京藝術大学美術学部工芸科染織専攻卒業。90年代より、電気製品を用いたサウンドスカルプチャーを制作。大量消費社会が急速に拡大した20世紀後半以降のシンボリック・アイコンを「回転するモーター」に設定し、アートを通じた「物質世界のリサーチ」を標榜する。世界各地で個展を開催し企画展にも多数参加している。